

ずいそう

社史との対話

池上 義信



55歳で新入社員になった。

入社後3年経ったころ、会社の中期経営計画の策定に当たって、その基礎作業を会社が委託した経営コンサルタントから、ヒアリングがあった。行政という外部の世界から入社した立場で、今のどこがよくて、またどこを改善すべきかについて、個別具体的に、アンケート式に訊くという。

私にとって荷の重いアンケートだったので、ヒアリングは雑談に代えてもらった。

ヒアリングの時間が終わって、ふと、思った。私は、線路の途中の駅で乗車した人間で、どこが発発でどこが終点の電車かを知らずに乗っている。私自身、会社が築いてきた線路を知らないのである。

そこで、社史をひもといてみることにした。良質の紙で300ページを超える本のお厚さにひるむ。

私は、色鉛筆で線を引かないと頭に入らないたちなので、総務部長にたのんで在庫を一部譲り受けた。

文章の要所に遠慮なく線を引くことで、難攻不落の社史に入城した気分になる。読み進むうち、会社が築いてきた線路が次第に見えてきた。

「わが社の線路」は、地理的には朝鮮半島や中国大陸東北部から、時間的には戦前から敷かれていたのである。

満鉄や朝鮮鉄道といった当時の先端インフラ部門で活躍し、戦後帰還した技術者の救済と活用をはかるために、敗戦1年後、社団法人復興建設技術協会が発足した。

その中国四国支部が、私の勤務する復興調査設計株式会社の前身である。支部発足時の職員は30人であるが、朝鮮鉄道と満鉄の技術者が中心であったことをおもえば、わが社の発祥はアジア大陸にあるとってよからう。

14年経過した昭和35年には、建設コンサルタント業らしい組織体制へと株式会社に移行し、中国四国復興事務所と名を変えた。「復建」とは「復興建設」の略であるが、戦後という時代が必要とした理念や気概がよく出ていると思う。

6年後の昭和41年、社名から地域名をはずして復

建調査設計株式会社になる。中国四国に根をおろす会社の全国に枝を張る姿が、社名からみてとれる。

こうしてわが社の線路は、アジア大陸から発し、海を伝って中国四国に線路の要を築き、さらに日本列島を縦貫するように線路を拡張してきたのである。

日本の戦後の歩みは、技術的側面に限らず、復興建設（復建）の歩みでもあった。その間、建設コンサルタント業も育ち、独立的な業種に成長した。

しかし、我が国が発展国から成熟国に進展するにしたがい、「建設」のパイは減り、会社の「生き方」に警鐘を鳴らしている。

また、公共事業手法への市場競争原理の徹底化は、会社の「行き方」に、意識改革を催促している。

こうして、縮減するパイを獲得する自由競争の風雪にさらされ、わが社の線路も安泰ではない。

わが社の、社会への協力を何にも増して大切にする誠実な社風は、自由競争の極みに近づいていく仕事の獲得手続きに、ためらいを感じてしまう気風とも通じていることを感じさせる。これは、会社の成り立ちが日本の復興を支える社団法人であった、そのDNAによるのかもしれない。

この小文は、途中乗車した社員の社史対話からの随想である。戦後と戦前が、人的にも、技術的にも、切断されずにつながっていて、そういう線路に途中乗車できたという臨場感も湧いてくる。私がひもといいた社史は、会社への想いを誘う物語が詰まっていた。

ところで、わが社の社史は、製本、装丁が立派で、いかにもとっつきにくい。図書館の社史コーナーを訪ねてみると、多くの社史もそうである。

いったい、読まれることを歓迎してくれているのかと、疑問さえわいてくる。社長室などの書棚に、文化財のように飾っておくことが似合いそうであり、少なくとも、社員に対話を誘うような作り方、置かれ方はされていないように見える。

社史は「企業が出す自分史」である。途中から社史の世界に入る新入社員のためにも、「対話しやすい社史」を工夫する余地がありそうである。

—いけがみ よしのぶ 復興調査設計(株) 企画開発本部技師長—